

春子さん物語

雀遊

或る晴れた朝、私はいつものように公園を散歩していました。

遠くのベンチからホームレス姉妹の澄んだ歌が聞こえてきます。

♪歌を忘れた母さんの 歌を唄うのは誰れ♪

♪春を忘れた母さんの 花を待つのは誰れ♪

日溜まりのベンチに春子さんがいました。

朝の光は心地よく、空気は澄んで林の梢で小鳥が囀（さえず）り、草むらでセイタカアワダチソウが風に揺れています。

でも春子さんの顔は沈んでいます。いつもの陽気さが感じられないのです。

「ねえ春子さん、元気がないわね。どうかしたの？」

春子さんは私を見上げて言いました。

「小夜さん、悩んでいるのよ私。電話があつたの。あれは月が鋭く尖った夜だったわ」

「春子さんの部屋の電話が鳴った。」

「はい。春子です。どなた？」

「あつ、おばあさん。忠太郎です。ご無沙汰しています」

「ちょ、ちょっと待って頂戴。忠太郎って、貴方はどなた？ 誰なの？」

「いやだなあ、おばあさんたら、忠太郎です。孫の忠太郎ですよ。おばあさんの娘、小梅の息子の忠太郎です。まさかお忘れじゃないでしょう？」

「あの〜これきつと間違い電話ね、番号が違うのよ。電話を掛ける時は良く番号を調べてね。さようなら」

春子さんは、私の顔を見つめて言いました。

「ねえ小夜さん、あの夜私はそう言って電話を切ったの、」

「ははっ、それってただの間違い電話じゃありませんか。だって春子さん御主人が亡くなって身寄りは一人もいなくなつたとおっしゃってましたでしょう。悩みの種はその間違い電話なの？ 春子さん」

「まあ、いいから話の続きを聞いて頂戴」

「春子さんの部屋で電話の呼び出し音が鳴っている」

「はい、春子です」

「もしもし今晚は。忠太郎です、ひどいなあおばあさん、この間は急に電話を切つてしまふんだもの。今日は最後まで僕の話聞いてくださいよ」

「まあそうね、話を聞くだけなら、」

「おばあさん、実は母が病氣なんです。入院していてすぐに手術が必要です。それにはお金が掛かります。僕はフリーターでお金に余裕がないし、弟はまだ学生だし、」

「だけど、お父さんはどうしているの？ お父さんは？」

「いやだな、おばあさんたら。知っているでしょ父の事は。僕たちが子供の頃“かくれんぼ”をして遊んでいたあのよく晴れた昼下がり、鬼になった父は僕たちを探さず、家を捨てて何処かへ行ってしまった事を」

「あらまあ、お父さん家出しちゃったの？」

「そうです。きっと今頃何処かの町の路地裏で、見つかる筈のない誰かを探し続けているのです」

「そうだったかしら？ そんな事があったのね。すっかり忘れていたわ」

「お願いです、おばあさん。僕にお金を貸してください」

「あら、お金の話？」

「はい。すぐにお返し出来ませんが、いつか必ずお返しします。僕たち母を助けたのです。もう一度静かに笑うあの母の笑顔が見たいのです。おばあさんも覚えているでしょ？ 微笑むと左の頬にえくぼの出来る母の顔を」

「そうだった？ すっかり忘れていたわ」

「ああ、みんな忘れてしまったのですね。ねえおばあさん、時として忘却は美しいものです。でも今日はお願いだから母を思い出してください」

「ごめんなさい。近頃物忘れが激しくて」

「その次の日私は春子さんを連れて、御隠居の家を訪ねました。」

「ねえ、あくびばかりしていないで聞いてくださいよ御隠居。春子さんたら引っかかっちゃったの。あれに、ほらあの振り込めっちゃつに、ねえっいたら聞いているの御隠居？ 人一倍しっかり者のこの春子さんがよ、私にはとつても信じられない、」

「ほう、するつてえと春子ばあさんは、その忠太郎って男に金を貸しちゃったのか？」

「何を言ってるんですか御隠居。春子さんはお金を貸したんじゃないやありませんよ。騙し取られたのよ。さつきから何を聞いていたんです、まったくもう、」

「それで、ばあさんいくら振り込んだの？」

「ええ、言われた口座に300万円、」

「えっ、さん、300万。300万も、」

「そうよ、御隠居！ 騙されたのよ春子さんはもの見事に鮮やかに。こんな単純なお涙頂戴詐欺に引っかかってしまったのよ」

「それにしても春子ばあさんや、そんな大金をどうしてまた、」

「ええ、それがね御隠居。先だって亡くなったおじいさんの遺言で、これはお前が好きな時に好きなように使えつて残してくれたものなの」

「ふん、でもなばあさん、それだけの金があるなら、三か月分溜まった家賃くらい払っておくれよ。町会費も滞っているし、」

「だって私、このお金は好きに使う積りよ」

「うん春子さんの話にも一理あるわね」

「ふん、まったくこんな話聞いた事もねえ」

数日後、私は御隠居と居酒屋で会いました。酒を酌み交わしながら御隠居が言いました。「なあ小夜さん、春子ばあさんは本当に騙されたのだろうか？ この町内に来てからは亡くなったご主人と二人きりだったな」

「そうね春子さんこれで私身寄りが一人もいなくなったって、とつても寂しそうだった」「うん、でも本当のところは誰にも判らないよ。わしだって、そもそも小梅という名の娘さんなんて居るとは思っていないよ。まして、忠太郎なんて孫は居る筈もないだろうが。でもな本当のところはいつだって誰にも分かりはしないものだよ、小夜さん」

「そりゃ御隠居、当たり前ですよ。そんな身内なんて初めからいないのよ春子さんには。騙されたのよ忠太郎って言う詐欺師に」

「しかし“実際に起こらなかった事も歴史のうちだ”と昔誰かが言ったように、春子ばあさんの心の中に実際に起らなかった歴史が静かに流れているのかもしれないな」

「私はそんな訳の分からない歴史なんて信じたくないわ」

「まあ、忠太郎と名乗る男も恐らくただの詐欺師だろうが、春子ばあさんと話している時には心の何処かで幻の祖母を想い描いていたのかも知れない。なあ小夜さん、春子ばあさんが落ち込んでいるのは決して騙されたと思っっているからじゃないよ」

「でも御隠居、300万円も騙し取られて落ち込まない人なんていませんよ。とにかく春子さんはこの事を警察に届けるべきよ。だって立派な詐欺なんだから」

「まあ、それは春子ばあさんが決める事だよ。ばあさんに茶飲み話でもしに来るように言っておくれよ」

～そしてある夜、春子さんの電話が鳴る～

「はい。春子です」

「もしもし今晚は。僕は忠太郎の弟の勘三郎です。お陰様で母は手術を受けられる事になりました。有難う御座いました」

「あらまあ、忠太郎の弟さん。何の用？」

「あの～おばあさん、僕は今困っています。飼っている猫が怪我をしちゃって手術代がいるんです」

「まあ、今度は猫の手術なの、、」

「犬猫病院で入院と手術代で38万6千5百円掛かるんです。助けてください」

「あらあら何て事、猫に小判って話は聞いたけど、猫に手術だなんて、、」

その話を聞いて私は春子さんを連れて又御隠居の家を訪ねました。

「それではあさん、あんたは又金を振り込んだって訳かい？」

「そうなんですよ御隠居。なんでも屋根の上で昼寝をしていて落ちたんですって」

「その勘三郎って男がかい？」

「いいえ嫌ですよ御隠居。ペーパームーンですよ、落ちたのは」

「ペーパームーン？ 誰だそれは？」

「だから猫よ。名前がペーパームーン」

御隠居が春子さんの電話の着信記録を調べたら、電話は全て児童養護施設から掛けられたものでした。三年前までそこで暮らしていた太郎と三郎という兄弟が掛けていたのです。二人の母親は兄弟を引き取って直ぐに、病に倒れ亡くなったそうです。

そして近頃、春子さんの様子が変なのです。夜になるとよく電話を掛けています。

「もしもし紋次郎？ 私よ私。春子おばあさんよ」

「もしもし誰だい？ 紋次郎だって？ 俺は紋次郎なんかじゃないよ」

「何言ってるの。あなたは私の孫の紋次郎でしょう？ いやねえ忘れてしまったの。会社のお金を使い込んで途方に暮れている私の孫の紋次郎よ」

「ち、ちよつと待って。あんた何の話だよ」

「さあ早く口座番号を教えて頂戴。すぐにお金を振り込むから」

「ちよつとあんた間違いだよ、人違い。俺は金なんか使いこんでいないよ。あんた電話を掛ける時はよく番号を調べろよ。ガチャ」

～そして次の日の夜も～

「もしもし幸四郎？ おばあさんよ、春子おばあさん。さあ元気をお出しなさい」

「もしもし僕は元気です。それに僕は幸四郎なんて名前じゃありません。これ間違ひ電話ですね、おばあさん」

「だってあなた、自動車事故の示談金が払えなくて困っている孫の幸四郎でしょ？ 寝ぼけないで頂戴」

「いいですかおばあさん、僕は寝ぼけちゃいません。それに自動車事故なんか起こしてません。番号をよく確かめて！ ガチャン」

私と春子さんは月の綺麗な夜、公園のベンチに座っています。

「ねえ小夜さん。もし世界中の忠太郎が、おばあさんと作り話をするために同じ時間に電話かけるの。そして世界中の春子さんが同じ時間に受話器を取り上げたらどうなるの？ きつと行き場を失った何千何万の忠太郎と春子さんの悲しい響きが泣きながら月まで届くのよ。あの夜空で決して癒される事のない悲しみと怒りが、いつまでもさ迷っているの。いつまでもね、」

翌朝、公園の雑木林に翼の折れた天使が横たわっていました。その顔はどこか春子さんに良く似ていました。

〈選評〉 とてもよい作品だと思います。私のお気に入りです。「振り込め詐欺」がどうして成り立ってしまうのか、本質をついていると思います。春子さんがとても魅力的です。だからこそ、最後がとてつもない。と同時に、春子さんがこの世に満ちる孤独を癒してくれた気がして、私自身も救われた気持ちになりました。「春子ばあさんの心の中に実際に起こらなかった歴史が静かに流れているのかも知れないな」という名ゼリフ、忘れられませぬ。(星野)